

# 跨境民・ラフ族

片岡 樹

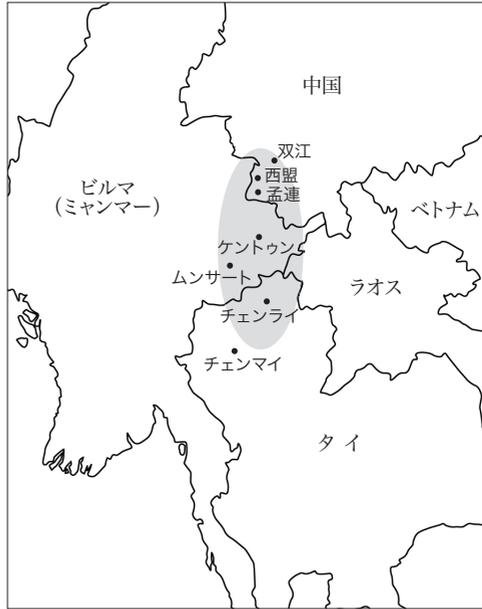
## はじめに

ラフ族というのは、チベット・ビルマ語系の言語を話す民族で、中国では雲南省の西南部に集中的に居住している。ただしこの地区の他の民族の例にもれず、その同胞は国境を越えてビルマ（ミャンマー）、ラオス、タイ等に居住している。中国国内には四万七六三一人が居住し、そのうち最大のラフ族人口を擁するのが瀾滄拉祜族自治県（一九五七九六人）である。<sup>①</sup> そのほかタイ国には約一二万人、ビルマには一〇万人強、ベトナム、ラオスにはそれぞれ四千人、五千人が居住していると考えられる。<sup>②</sup>

ラフ族をはじめ、雲南西南の諸民族は、いわゆる「跨境



民族」として知られている。<sup>③</sup> ここには二つの含意がある。そのひとつは、中国とその隣接諸国にまたがって住んでいるという事実そのものを意味する。もうひとつは、そうした諸民族が、現在まで絶えざる移住を繰り返してきており、時として国境線を跨いだ往来も継続しているという意味である。いずれにせよ、「跨境民族」なるものが成立するためには、国境線が存在しなければならぬ。そしてそれは、近代国家の成立以前は必ずしも自明なことではなかった。ある民族の分布域が国境線によって引き裂かれてしまったのか、あるいは国境線が存在するがゆえにそれを意識的に越えてきたのか、そのいずれかあるいは両方の過程を通じて、「跨境民族」は成立してきたのである。したがって「跨境民族」というのは、決して自然のあるがまま



ラフ族の分布地域

## 一 「跨境民族」としての歴史

### (一) ラフ族の生業

そもそもラフ族の伝統的生業とは何だったのか。一般にはそれは「刀耕火種」すなわち焼畑農耕だということになっている。新規開墾による焼畑を繰り返しつつ移住を行ってきた、というイメージである。しかしこのことは、人々が国家権力と無関係に山野を自由に放浪しているうちにいつの間にか国境を越えてしまったという牧歌的な図式を意味するとは限らない。むしろ近代国家形成に先立つ一八〇一九世紀のラフ族地区は政治、経済両面での激動にさらされており、そうしたなかで生業の転換や移住が行われてきたのである。

に存在するのではない。むしろこうした諸民族のありかたは、国境線を引いたり跨いだりという、近代国家の成立に直接関わる政治のダイナミクスを映し出す鏡なのである。以下ではラフ族の事例から、彼らがいかかにして跨境民族となっていたのか、またその複数国にまたがる生活世界をどのように作りあげてきたのかを見ることで、中国と東南アジアにまたがる民族の動態を考えることにしたい。

ラフ族が中国の史書に頻繁に登場し始めるのは、清朝中期になってからである。乾隆『雲南通志』ではラフ族の生業について、稗を主食とし、そのほか野草や樹皮、藤蔓、小動物の採取によって生計を立てていたと説明している。焼畑農業を行う一方、狩猟採集の比重も相当に高かったものと推測される。これは雲州（現雲県）での資料として紹介されているが、雲州はラフ族の集住地区から遠く北に隔たっているため、乾隆期（一七三五〜九五五年）よりもだいぶ以前の情報である可能性が高い。いずれにせよ一八世紀

にはいると、周囲から隔絶したかのような低水準の自給自足的な生活は大きな変容を迫られていく。

武内は、この時期のラフ山地において、漢人移民の流入と貨幣経済、商品作物の導入が急速に進展したことが、政治面、経済面の双方で混乱をもたらしてきたことを指摘している。<sup>⑤</sup>雍正期（一七二二～三五年）から嘉慶期（一七九六～一八二〇年）にかけては、瀾滄江（メコン川）<sup>⑥</sup>の兩岸で、ラフ族の略奪団の活動が頻繁に記録されており、そこではしばしば、これらラフ族は農業に従事せず略奪によって生計を立てていたと記録されている。実際に略奪が主生業であったかはともかく、この時期のラフ族の食糧生産が著しく不安定化していたことは確かかなようであり、それが隣接民族とのトラブルの背景ともなっている。

その一面、同時期には少なくとも一部で、定住的な稲作農業が普及し始めていたようである。人々の伝承によれば、かつてムメミメ（旧猛緬、現臨滄）では漢人から鉄器の使用と水稻耕作を学んだが後に漢人に征服され土地を奪われたと語られている。この漢人による征服というのが旧猛緬の「改土帰流」（土司の廃絶と清朝による直接統治の導入）について述べているのだとすれば、それは乾隆一一年（一七四六）のことであるから、右に述べた経済的混乱と相前後して水稻耕作が一部に導入されていたことになる。このように一八世紀から一九世紀にかけては、漢人の

流入、換金作物や水稻耕作の導入、一部焼畑民の略奪団への転落などの変動が同時に進行しつつあった。<sup>⑦</sup>このことが雲南西南部における民族間の勢力バランスにも変動をもたらした。それがさらなる人々の移住をもたらしていったのである。前述の伝承では、旧猛緬に開いた水田を漢人に奪われたのち、ラフ族の一部は南下移住に追い立てられて西盟に至り刀耕火種を行った、あるいは、旧猛緬で敗れたラフ族はビルマ領のムンサートに逃れた一団と、雲南西南のタイ系土司領である孟連の山地に逃れた一団とに分かれたと伝えられている。<sup>⑧</sup>

## （二）中国国家への編入

近代国家成立以前の雲南西南部においては、山間盆地をタイ系民族（現在の中国ではタイ族、ビルマ側ではシャン族等と呼ばれる）の王侯が支配し、それを取り巻く山地の首長がこれら王侯に服属するという関係が成立していた。盆地の王侯は自ら王を称しつつも中華帝国に名目上臣属して土司の官職を与えられ、また一方ではビルマ王朝にも臣属するという複雑な国際関係の中にあり、ラフをはじめとする山地民の首長はその国際関係の末端を構成していた。この民族間の主従関係は、一八世紀以降に急速に流動化していく。ここではタイ系盆地国家の国力の下落、漢人勢力の増大、そしてその間隙を縫って進められた山地民の自立

化などが相乗効果をもつて展開されることとなった。

瀾滄江東岸では一八世紀前半に清朝による改土帰流が強行された際に、ラフをはじめとする諸民族の反乱が発生しているが、中緬両属の土司領が残されていた瀾滄江西岸でも、一八世紀末からラフ族の土司(タイ系王侯)への反抗が本格化する。嘉慶期には猛猛(現双江)ではラフ族らによる土司の追放、孟連ではラフ族による土司への納稅拒否といった事件が相次いで発生する。この一連の過程で指導的な役割を果たしたのが内地から流入した漢人僧である。

この僧侶は数十か村にのぼるラフ住民の崇拜を背景に土司に対抗し、雲南辺境の政治的混乱をもて余した清朝政府から下級土司への任官を勝ち取っている<sup>⑩</sup>。彼はほどなくして、その増長ぶりを座視しきれなくなった清朝の軍事介入を受け処刑されてしまうのだが、これ以後ラフ族地区の各地に「五仏」「三六尊仏」などと呼ばれる仏房連合体が成立し、タイ系土司の支配から離脱していくことになる。

一九世紀後半に入ると、仏房勢力以外にもラフ族の在地領主が各地で台頭し、タイ系土司の山地への支配権はさらに有名無実化していく。こうした状況下に隣国ビルマが英国に滅ぼされたこと(一八八五年)は、清朝政府に雲南防衛と英領ビルマとの国境線画定という課題をにわかに突きつけることになった。ここで問題となったのはタイ系土司の中緬両属状態と周辺山地民の土司からの離反である。こ

の状態を放置することは、英国に干渉の口実を与えかねないため、清朝は先手を打ってラフ族地区に介入することで領有権の既成事実化を企てる。まず行ったのは、これらラフの半独立勢力のうち比較的清朝に協力的な者の土司への任官であった。これら新設土司は総称して一八土司と呼ばれる<sup>⑪</sup>。一八土司の領地は元來タイ系盆地国家である孟連土司領であったが、この時期には清朝は土司の当事者能力の欠如に見切りをつけ、孟連土司の頭越しに領域支配を確保し始めたわけである<sup>⑫</sup>。その上でなおも残るラフ族の反清勢力に対し、清朝軍は光緒一三年(一八八七)に大規模な武力討伐を行い、占領地を一八土司領とあわせて孟連領から切り離して鎮辺直隸庁を設置し、清朝の直接支配下に組み込んでいった。こうした清朝の強引な軍事干渉に抵抗した仏房勢力も、光緒一七年(一八九一)の武装蜂起が鎮圧されたことで、旧「五仏」の流れを汲む李通明が最終的に清朝に降伏し、雲南地区におけるラフ族の半独立勢力はすべて清朝の支配下に編入された。

同時期に英国は旧王朝ビルマの領域画定のための調査団を各地に派遣し、ビルマへの服属国を次々と英国の保護下に収めていった。そこでは当然、中緬両属状態にあった孟連、および名目上はその属領であったラフ山地の領有も検討されたが、鎮辺直隸庁での清朝による実効支配の既成事実化を前に孟連領とその周辺山地の領有を断念し、一八九

四年に清朝と英国のあいだで雲南国境の画定が合意される。ここにおいてはじめて、瀾滄江西岸の中緬両属地区が排他的に中国の領土として国際的に認知され、瀾滄江西岸のラフ族が「中国少数民族」となったのである。

とはいえ、これでラフ族地区における問題が収束したわけではなかった。仏房が清朝支配への抵抗拠点となつていることを認識した清朝政府は、「仏房を見ればすなわち焼き、仏翁を見ればすなわち殺す」という過酷な方針をもつて仏教勢力の物理的根絶をめざしていた。<sup>13</sup>一方のラフ族の側には、自分たちが仏房と仏翁の支配下に独立王国をもつていたにもかかわらず、それを清朝によつて不当に滅ぼされたという意識があり、<sup>14</sup>清朝政府による仏教教団の強引な解体はかえつて土着主義的な千年王国主義運動を統発させる結果を招いた。ラフ族による反乱は大きなものだけでも光緒二十一年（一八九五）、光緒二十九年（一九〇三）、さらに辛亥革命後の一九一八年にも発生し、そのたびに神の再臨が予言者によつて宣言されてきた。これら一連の反乱は、二〇世紀初頭には、千年王国主義と結びついたキリスト教への改宗運動にも発展することになる。

政府が雲南ラフ族地区の掌握に手を焼いたのは、雲南西南端にあたるこの地域が、政府の統治がおよびにくく、かつまた内地の不満分子が流入しやすいという立地条件のためでもあった。内地漢人の流入が経済の混乱や治安の悪化

をもたらす、あるいは流入した内地漢人がラフ族と連合して土司権力や清朝政府に敵対する、というのは清朝中期より何度となく繰り返されてきたが、鎮辺直隸庁（民国期に瀾滄県に改称）の設置や中華民国への体制移行によつてもその基本的な構図は変わらなかつた。たとえば一九三五年に瀾滄県の辺防状況を調査した周光倬は、瀾滄県の岩帥地区では一九二六年に辺防軍が撤退したあとは当地の少数民族が政府の無力を侮り、内地の匪賊と連合して「公然結党横行」という無政府状態になつてしまつてゐること、西盟地区では一九一八年のラフ族反乱以降は県佐（県知事に次ぐ職位）が任地から引き上げてしまひやはり無政府状態になつてゐることを指摘し、鎮辺庁の設立以来治安状況には「毫も進歩なしと言うべし」と断じ、「清末制度を恢復し、軍事をもつて政治推進の先鋒となすべし」と述べ、民国期には清末の武断統治よりも政府の当事者能力が低下していたことを指摘している。<sup>15</sup>そもそも中小土司（一八土司）の新設と鎮辺庁（瀾滄県）の設置とが並行して進められたラフ族地区の統治は、純然たる直接統治ではなく「流土兼治」<sup>16</sup>（流官と土官の双方による統治）とでもいふべき折衷的な形態であり、県行政のルートと土司支配のルートが併存していたことが、政府によるラフ山地の効率的な掌握を妨げていた。<sup>17</sup>

二〇世紀の雲南ラフ族地区におけるキリスト教の浸透

は、隣国ビルマでの改宗運動と連動して進められた。そのため雲南でもラフ族地区の教会は英領ビルマのケントゥンに本拠地を置くラフ教会の傘下に組み込まれ、教会の建てた学校ではビルマで宣教師が考案したラフ語ローマ字による教科書が用いられていた<sup>(18)</sup>。前述の周光倬もまた、一九三〇年代の瀾滄県山地ではラフ族のあいだでキリスト教の牧師が絶大な権威を誇っていたことを指摘しており、中国政府の支配がじゅうぶんに及ばない宗教勢力による山地での権威の確立、という意味では、キリスト教がかつての仏教の地位にとって代わったともいえる。

### (三) 社会主義化と移住

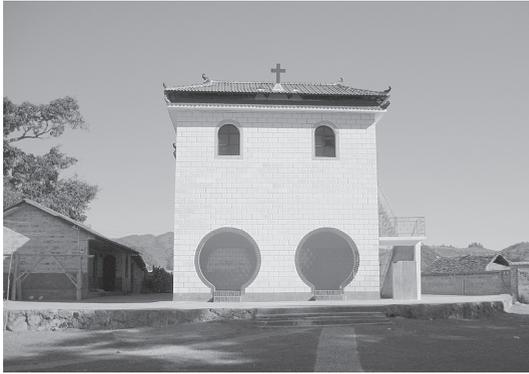
一九四九年に成立した中華人民共和国は、まさにそのような状況下でラフ族に接することになったのであった。当時のラフ族がどのような暮らしを営んでいたのかについては、共産党政権成立直後に行われた調査報告からうかがうことができる。

「解放」直後の中央訪問団による調査によれば、瀾滄県のラフ族の大部分は焼畑を営み、換金作物としてはケシを栽培し、ケシからとれるアヘンを税として大山土司（一八土司の一つ）の石炳麟に納めていたと記録されている。またこうした人々の多くがキリスト教を信じ、牧師の指導に信服していたとも述べられている<sup>(19)</sup>。

ただし焼畑への依存度には地域差があったようである。別の資料では、瀾滄県東北部のほか双江県、景谷県、鎮沅県のラフ族は「封建地主経済」段階と規定され、比較的農業が発展していたと指摘されている<sup>(20)</sup>。やはり「解放」直後に行われた調査報告によると、キリスト教の布教拠点が置かれた瀾滄県糯福区の場合、水田を中心としその周囲の山地を順繰りに焼くという定住度の高い農業が、一九世紀末には成立していたと考えられる。ただしこのことは、定住度の高い地域では国境を跨いだ移動が発生しないということと意味しない。すぐ後で述べるように、政治的な理由からの越境移動もまた多いためである。

ラフ族の宗教運動が中央政府との摩擦をたびたび引き起こしてきたことにはすでにふれたが、「解放」初期には、千年王国主義のイデオロムを用いた共産党政権の正当化も行われている。たとえば、共産党の教えは、人々の団結と助け合いを説き、アヘンや賭博や泥棒を禁じ、諸民族が一つの信仰と一つの心をもつというもので、これはラフ族の崇拜する至高神グシヤの教えと同じであり、毛沢東こそがグシヤであり、グシヤは今や地上に再臨したのだ、という説明などがそれである<sup>(21)</sup>。

その一方、キリスト教徒の少なくとも一部は、新たに成立した共産党政権との反目に陥っていく。「解放」時のラフ族のあいだには、キリスト教の影響がかなり浸透してい



瀾滄県にあるラフ族のキリスト教会

(2010年1月筆者撮影)

たようである。瀾滄県内では地区により、ラフ族住民の二〇から九〇%がキリスト教に入信していたと報告されている。ラフ族のあいだに広まったキリスト教のうち、その最大勢力はバプテテスト派である。前述の如く、雲南ラフ族の信者はビルマ領のケントウンを本拠地とするラフ教会の傘下に属し、ケントウンから糯福に赴任した米国人宣教師ウィリアム・ヤングとその息子ビンセント・ヤングの指導下にあった。キリスト教徒の指導部は、第二次大戦から国共内戦にかけては、親英米の立場からビンセントや石炳麟とともに国民党を支持し、彼らの一部は一九四九年に共産党軍が瀾滄に入るや一斉反共蜂起を企てている。他方共産党の側は瀾滄県の権力を掌握するや、キリスト教の牧師や信

者たちを集め、「帝国主義が宗教を利用して侵略活動の陰謀を進めていたことを暴露」する「反帝愛国教育」を開始する。この抜き差しならぬ対立の過程で糯福のキリスト教徒リーダーや一部の信者たちは瀾滄から逃亡し、国境のビルマ側で国民党軍残党がC I Aの援助を得て組織した「雲南反共救国軍」に参加し、さらにその蜂起に敗れビルマ、タイへと去って行った。

瀾滄県で人口の大量流出が発生した第二の契機が、一九五八年より始まる大躍進政策である。この急速な集団化は、当地の経済に大きな打撃を与えたようである。たとえば一九六〇年の農業生産を一九五八年と比較すると、穀類の収穫は一九五八年の七七・六%にまで落ち込んでいる。こうした経済の落ち込みに伴い、県人口も激減している。一九五九年から一九六〇年にかけて、人口が一六・二%も減少しているが、その前後には平均して一〇〜二〇%の人口増加率を示しているからこれは明らかに異常な人口減であり、単なる自然減とは考えにくい。筆者がタイ側にある中国出身ラフ族の調査村で移民史を調べたところ、中国を脱出した時期は中華人民共和国の成立直後と大躍進期に集中していた。瀾滄県を去った人口の多くは隣国に逃亡していたと考えてよいであろう。

## 二 隣国の同胞たち

### (一) ビルマ、タイへの初期の移住

焼畑に伴う移住や政治の激動の中で、ラフ族は雲南から周辺諸国山地へとその居住範囲を広げてきた。次に彼らの東南アジア側への移住について見てみることにしよう。

一八世紀以降の雲南山地ではラフ族など山地民と盆地のタイ系土司、および漢人（あるいは清朝）との民族間関係の流動化に伴い、紛争が多発する中でラフ族の移住が行われていったことはすでに見た通りである。そのほか一九世紀初頭には、チェンマイ王国（現タイ領）の軍が雲南タイ族地区への侵攻を繰り返しており、タイ側の年代記によれば、その際（一八〇三年、一八二八年）にラフ族（カー・クイと呼ばれる）の一部も戦争捕虜としてチェンマイに連行されている。<sup>(29)</sup> また一八三二年には孟連領内で仏僧による反乱が起こり、そこにはビルマ側のケントウン、ムンヤンからラフ族が兵士として参加していたと指摘されている。<sup>(30)</sup> 下ビルマの英国行政官マクレオドが一八三七年に上ビルマのケントウンに赴いた際の日記には、カー・クイ *Kai*（ラフ族のうちラフシ支系の他称）がケントウン周辺山地で数年ごとの移動を繰り返しながら農業を行い、穀物、煙草、唐辛子、綿花を栽培していたこと、彼らは首長

に対しては税の代わりに莫座や衣服を貢納していたことが記録されている。彼はムソー *Musa*（ラフ族ラフナ支系の他称）についても言及しているのだが、カー・クイ、ムソーのいずれについても、最高存在や来世の観念を知らずナット（精霊のビルマ語）を崇拜する、あるいは精霊中毒者でナットを崇拜すると言及されており、のちにラフ族の特徴となる至高神崇拜の突出は、少なくともこの時期のケントウンではいまだみられなかったことがうかがえる。<sup>(31)</sup>

一九世紀末から二〇世紀初頭には、西洋人による東南アジア側での記録にラフ族がさらに頻繁に登場するようになる。英領ビルマで一九〇〇年に出版された『上ビルマ・シャン州地名録』には「ラフ部族『The Lahu Tribe』という項目が立てられ、大仏爺が支配するラフ族の独立王国が一九世紀末に清朝軍によって滅ぼされた際に多くのラフ族がビルマ側に逃亡したこと、またラフ族の南下移住は現在も継続中であり、彼らは遊動的でその移住の最南端はチェンマイにまで達していることが述べられている。また生業としては、南部（タイ国境近く）では稲が栽培されているが北部（中国国境近く）ではケシのほかライ麦、トウモロコシが主作物で稲は栽培されておらず、それにふさわしい土地があれば水田耕作を試みる場合があるがそうした機会は非常にまれであると記されている。<sup>(32)</sup> 一八七六年にシヤム（現タイ）領内で鉄道建設調査を行ったハレットの紀行文

にもラフ族が登場する。彼らがチェンライで接触したラフ族は、糯米、煙草、綿、唐辛子などを栽培しており、西盟の首長に忠誠を誓っていたという<sup>33</sup>。シヤム領の測量を行ったマッカーシーは、一八九一年にシヤム領北端のムアン・フアーンでラフ族と接触し、彼らがつい近年の中国での戦いに敗れて移住したこと、現在は焼畑移動耕作を行いながら綿、トウモロコシ、麻、稲を栽培し、ムアン・フアーンの領主に蜜蠟を貢納していたことを記している<sup>34</sup>。

二〇世紀初頭に発生したキリスト教への集団改宗運動もまた、人々の移動を伴っている。一九〇四年よりビルマ領のセントウンでラフ族によるキリスト教への集団改宗が発生するのだが、その噂は隣時に国境の中国側にまで伝えられ、最初の洗礼が行われた直後から宣教師は、中国側から彼を訪ねてくるおびただしい数の入信希望者の対応に忙殺されることになる<sup>35</sup>。中国側のラフ族における最初のキリスト教徒は双江の李老大、李老二という人物で、彼らは光緒二九年（一九〇三）の双江での反乱に敗れセントウンへと逃亡していた。そして逃亡先のセントウンで宣教師ウイリアム・ヤングの教えにふれ入信したのちに中国側に戻って布教を行い、のち一九二〇年にヤングが中国側に本格進出し糯福に布教ステーションを設立するにあたっては、彼ら李氏一族がヤングを支え糯福教会および同地区の中核的リーダーとなっていく<sup>36</sup>。のちにこの李氏一族はラフ族キリ

スト教徒のビルマ、タイへの移住に中核的な役割を果たすことになるのだが、このように「跨境民族」としてのラフ族の移住は大きく言えば北から南へ、という流れの中にあるとはいえ、個々の局面においては極めて複雑な南下、北上双方のベクトルの交錯がみられるのである。

## （二）現代史の中の移住

さきに述べたように、中華人民共和国の成立後に雲南のラフ族キリスト教徒の一部は、共産党政権と対立し、ビルマへと去って行った。当時糯福で郷長を務め、ラフ族キリスト教徒の政治面でのリーダーとなっていたのは前記李老大の息子の李崇仁である。彼は共産党政権成立時に再教育施設に送られた後、瀾滄で前記ビンセント・ヤングらの反共蜂起に参加してそのままビルマ側に逃亡してしまう<sup>37</sup>。その後彼はビルマに逃れた国民党軍による「雲南反共救国軍」とともに一九五一年の孟連再侵攻にも参加しているが、敗れて再びビルマに逃亡している<sup>38</sup>。これ以後、中国から逃亡したラフ族キリスト教徒たちは、中国国民党やCIAとともに冷戦期における反共陣営の最前線を担うことになる。

ラフ族キリスト教徒のタイ領への移住は、一九五〇年代より開始される。その背景をなすのが、当時のCIAによる対中諜報工作である。当時のチェンマイではビンセン

ト・ヤングの兄ハロルドがCIAの依頼を受け、ラフ族キリスト教徒による諜報部隊を組織し、ビルマ領の中国国境に派遣するという活動を行っていた<sup>38)</sup>。同時期にはハロルドの仲介により、タイ国での定住を前提とするラフ族キリスト教徒の移住も開始される。彼らはチェンマイ県山地の茶園労働力として入植し、その一部は移住後も国民党軍に参加している<sup>40)</sup>。

一九六〇年前後にはビルマ・シャン州（中国、タイの双方と隣接する）山地の政情もまた混乱の度を強めている。一九六〇年には中国国境より侵入して山地を占拠していた国民党軍がビルマ領内から駆逐される一方、それに先立って国民党軍対策の名目でシャン州に進駐したビルマ連邦軍がシャン民族主義者の取り締まりを開始したため、シャン分離主義者ゲリラとの内戦に陥っていく<sup>41)</sup>。これは中国での大躍進政策により、瀾滄県ラフ族の集団逃亡が発生したのと同時期にあたる。そうした混乱の中で、一部のラフ族キリスト教徒は、李崇仁の指導下に国民党軍とともにタイ側に移住していった。李崇仁らは一九六二年に国民党軍とともにタイ領最北端の山であるドイトウンに移住し、ドイトウンを帰休基地にラオスでのCIA諜報活動に従事する<sup>42)</sup>。この作戦が一九七二年に終了すると、李崇仁はドイトウン山頂付近に新たな村を建設し同胞をビルマから招いている。当時のビルマでは共産党軍の攻勢が激化し、シャ

ン州での政情はさらなる混乱に陥っていた。こうした情勢の悪化のなかで、一部のラフ族キリスト教徒は移住に応じ、一九七三年一月に二千人が徒歩でタイ領ドイトウンに入国し、のちにタイ国内各地に再移住していった。この事件はタイ側に住むラフ族キリスト教徒のあいだでは、現在でも「大移住」として語り継がれている<sup>43)</sup>。

こうした経緯は、タイ側でのラフ族人口の激増に反映されている。タイ政府による山地民の掌握努力が開始された一九六〇年代初頭にはラフ族人口はおよそ一万五千人と推定されていたのが、一九九七年には八万五八四五人にまで増加している<sup>44)</sup>。そして五年後の二〇〇二年には一二万人を突破する。こうした極端な人口の伸びは、単なる自然増ではなく隣国からの人口流入が一貫して続いていることによると考えるべきであろう。

ただしこの時期には逆向きの運動も存在した。「大移住」の参加者も、その一部は移住後の土地不足などを理由に数年後には再びビルマに戻っている。そのほか、独立後のビルマにおいて、特に一九六〇年前後からシャン州の政情が悪化したことはすでに述べたが、そのなかでラフ族の一部（非キリスト教徒）もまた、宗教指導者に率いられた独自の軍隊を擁してビルマ政府と対峙していた。この宗教指導者はモナグシャ、モナトポ、モナポク、ポク・ロン、プチョン・ロンなどの名で呼ばれる予言者であり、その名

の通り自ら至高神グシャの化身を名乗り、ラフ族の教団国家の再興をめざした運動を展開した。彼は一九五八年には、すべてのラフ同胞はムアン・ファーン（タイ領の最北端に近い町。前述）より南に住んではいけないという指令を発し、タイ側に住むラフ族の信者の多くはその指令を受けてビルマに赴き、モナグシャの運動に参加したという。

ゲリラ兵士を率いてタイ、ビルマ国境を往来する現代の指導者にサラ・イセという人物がいる。彼はビルマのケントゥン近郊の村で高名な牧師の息子として生まれ、一九八〇年には当時国境のタイ側の町を占拠し基地を設けていた麻薬王クンサが率いるシャン軍に参加し、クンサ軍が解散した一九九六年には自らの私兵集団を立ち上げている。彼はタイ・ビルマ国境のビルマ側に覚醒剤工場を設け、タイ側の旧クンサ軍の根拠地近くに私邸を構え、国境の両側で活動していたが、一九九九年にはこれまで黙認してきたタイ政府との関係が悪化し、私兵とともに国境のビルマ側へと本拠地を再度移転している。

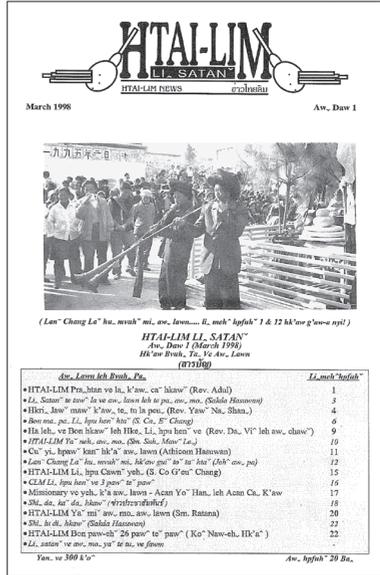
サラ・イセの場合は私兵を率いていたので事例として目立つが、彼に限らず、タイ側で何らかの不都合が生じるとビルマ側に移り、ビルマ側で不都合が生じるとタイ側に移る、という行動は、ミクロレベルでは日常的に行われている。卑近な例でいえば、タイ側からビルマ側のラフの神学校に留学していた学生が留学先の学校で女教師と恋に落ち

てしまい、社会的非難を恐れてタイ側の実家に駆け落ちしたという例もある。また、新年祭等での国境を挟んだ相互訪問も珍しくなく、若者にとってはそれが配偶者探しを兼ねることから、国境の向こう側に伴侶を見つけてしまうこともある。ラフ族の慣習によれば、新婚カップルは三年ごとに妻方居住、夫方居住を繰り返して最終的に独立していくのが望ましいとされるため、この規定を厳密に実行する者は小刻みに国境を跨いだ転居を行うことになる。

### 三 跨境民の現在

#### (一) 改革・解放と対外交流の拡大

冷戦構造の終結は、ラフ族が居住する地域の状況を一変させた。それは社会主義圏における経済自由化と、国家間の往來の活発化として要約できる。うんと簡単にいえば、雲南西南辺境は、冷戦期における対立の最前線から、ポスト冷戦期における国家間交流の最前線へと劇的にその位置づけを変更したのである。こうした変化が跨境民族としてのラフ族に与えた影響は、次の二つの脈絡で考えることができる。ひとつはメコン流域圏開発であり、もうひとつは中国の西部大開発である。このように考えると、現代の雲南辺境というのは、まさにこの二つの政策課題が交錯する



タイ側教団誌(HTAI-LIM Li Satan)創刊号の表紙を飾る中国ラフ族

場所にあることがわかる。

文革中には雲南西南部と隣国との往来は途絶していたが、中国政府が対外開放に舵を切った後は、瀾滄県は再び隣国ビルマとの交易窓口となっていく。まず一九八四年には瀾滄県糯福郷の阿里において対外交易が再開され、そこでの交易条件(限度額等)も徐々に緩和されていく。さらに二〇〇〇年には県内の対外交易拠点は阿里を含め三か所に拡大されている。二〇〇一年には国家レベルでの西部大開発の開始を受け、雲南省および瀾滄県でも貿易や国外からの投資の拡大が奨励されている。こうした一連の交流拡大政策は効果をあげ、二〇〇四年には瀾滄県からの対外貿易は輸入額において一九九〇年の三〇倍、輸出額において

一〇倍にのぼっている。<sup>(48)</sup>

ところで前述のように、中国、ビルマを脱出してタイ側に移住したラフ族キリスト教徒は、冷戦期には中華人民共和国と敵対する反共陣営の最前線を構成していた。しかし中国側が開放に転じたことに伴い、タイ側に住むラフ族キリスト教徒の中国への姿勢も大きく転換する。タイ国のラフ族キリスト教徒の主力団体であるタイ国ラフ・パプテスト連盟(TLBC)は、一九九一年以来、ほぼ毎年定期的に雲南の同胞への訪問を開始している。TLBCは一九九八年に機関誌(HTAI-LIM Li Satan)を創刊しているのだが、その創刊号の表紙は瀾滄県のラフ族の写真であり、また巻頭言ではその三分の一が中国側のラフ族キリスト教徒同胞に関する記述(キリスト教徒の人数、牧師の人数、神学校の設立計画<sup>(49)</sup>、彼らを援助する必要性など)に割かれていることなどに、中国への関心の高さが示されている。中国側では現在でも外国人による宗教の布教は認められていないが、跨境民族の同胞訪問という形式であれば教会関係者の交流は可能だということが、タイ側の教会関係者たちの中国訪問熱を支えているといえる。

同じようなことは、中国側のラフ族キリスト教徒についてもいえる。たとえば瀾滄県のある牧師は、二〇〇九年にタイ国を訪問し、各地の同胞を訪ね説教・伝道を行っている。この場合も探親ビザによる入国であり、跨境民族の宗

教活動においては、探親と布教との線引きが実際には非常に難しい。なおこの牧師は母が一九五八年に中国からビルマに脱出した後にビルマで生まれ、前期「大移住」（一九七三年）に参加してタイ国に移住し、さらに一九七八年にビルマに戻り、一九八二年に中国（瀾滄県）に移住したという経歴の持ち主であり、そうした経緯からタイ国内に知己が多いことが彼の活動を容易にしている。

## （二）観光開発と新たな文化的シンボルの形成

右に見たような雲南辺境の開放は、観光の振興をも伴っている。西部大開発の文脈においては、沿海部の所得を内陸部に移転するためのひとつの有力な選択肢が観光であり、またメコン流域圏開発においても、観光は近隣諸国から人を呼び込む契機として期待される。これは瀾滄県においては当然ながら、ラフ族文化を観光資源として内外に売り出すということを意味する。

瀾滄県では対外貿易の再開から数年遅れた一九九二年に県旅游局が設立され、二〇〇三年には中共瀾滄県委第九次党代会にて「ラフ文化興県」が提議されている。この「ラフ文化興県」を実現するにあたり、瀾滄県の石春雲県長は、(1)ラフ族の優秀な伝統文化資源の発掘・保護を強化すること、(2)ラフ文化を堅持、発展、創新し豊かにすること、(3)ラフ文化産業を積極的に育成し発展させること、(4)

胡蘆節（後述）を発展・強化し経済効果を呼び込むこと、という戦略的対策を掲げている<sup>53</sup>。また同時期には、雲南省科技庁が主催し省内の政府、学術機関などが共同で作成した政策提言「雲南省参与瀾滄江—湄公河次区域合作二〇〇三—二〇一五年企画研究」において、メコン流域圏共同開発のうち観光業における重点合作項目が掲げられている。

そこでは、「旅游景区景点開発」の一七の目標のうちに「瀾滄ラフ民族文化旅游項目」が、「旅游资源と生態環境保護」の六つの目標のうちに「思茅ラフ民族文化保護」（瀾滄県は行政上は思茅市に属す）が掲げられている<sup>54</sup>。

このように改革・開放以来、ラフ族文化を観光資源として内外に売り出す必要が急速に高まってきた。それを受けて登場したのが「胡蘆文化」論である。これはラフ族文化の特徴を胡蘆すなわちひょうたんというシンボルに収斂させて宣伝するもので、その根拠はひょうたんから人々が生まれたというラフ族の創世神話や、ラフ族の伝統的音楽や舞踊で用いられるひょうたん笛に依拠している。

「胡蘆文化」という用語法の登場は、筆者の知るかぎりでは二〇〇二年が最初である。そこでは「胡蘆文化」について次のように説明されている。「胡蘆文化とはラフ族の自然界や社会矛盾との不断の闘争の産物であり、ラフ民族の自然の征服、自然の改造、新生活の創造の歷程を体現し、また胡蘆箏と胡蘆舞に代表される文化精華を形成して

いる。(中略) 葫蘆文化とはラフ族伝統文化の重要組成部分であり、単にラフ族のよりよい生活への希求を反映するだけではなく、ラフ族の集体主義精神と民族凝集力をも体現している<sup>55)</sup>。

ひょうたんをラフ族文化の中心的モチーフとする宣伝は、それに先立ち「葫蘆節」という新たな民族節日の制定として始められている。一九九一年一月に瀾滄で行われた『ラフ族史』検討会(『ラフ族史』出版のための準備委員会)において、創世史詩「ムパミパ」(天地創造の意)によればラフ族はひょうたんから生まれたとあることを根拠に、毎年農曆一〇月一五日をラフ族先民の誕生日とし、これを民族の統一節日することを民族幹部が決定している。そして一九九二年八月には、瀾滄拉祜族自治県人民代表大会常務委員会が、毎年農曆一〇月一五〜一七日をラフ族の「阿朋阿龍尼」(葫蘆節)とすることを決定し、同年より実施が始まる。その内容は民族歌舞、文体活動、科技および商業物資交流活動などである<sup>56)</sup>。ここでいうラフ族先民というのは、ようするに人類始祖チャティ、ナティのことであるが、その誕生日を農曆一〇月一五日とした理由は、『拉祜族文化史』によれば次のようなものである<sup>57)</sup>。「ラフ族口碑史詩『ムパミパ』中の神話伝説によれば、造物主グシャは天地と日月星辰を創造した後、日月星辰に名前を与えた最初の日を亥の日、最初の月を農曆一〇月とした。

グシャは天地を造り、葫蘆を植えて人を造った。葫蘆は一〇月に成熟し一五日ごろ実を結び、人類始祖チャティ、ナティが葫蘆から出てきた。これにより、農曆一〇月一五日がラフ族の伝説上の祖先の誕生日となる」。

にもかかわらず、葫蘆節の日程はのちにあっさりと変更されてしまう。そこには、前述の「ラフ文化興県」政策が大きく関わっている。この文化興県の課題の一つとして「葫蘆節を発展・強化し経済効果を呼び込むこと」が掲げられているのはすでに見た通りであるが、この目標に従って、二〇〇五年に葫蘆節の日程変更が県長より提案されている。その理由として挙げられているのは、

(1) 葫蘆節は民族伝統節日ではなく、年中行事としてまだ広く受け入れられていないため、人々の生産活動や生活習慣に悪影響を与えないよう日程を調整する必要があること、

(2) 四月七日が瀾滄拉祜族自治県の設立記念日であるため、葫蘆節を同時期に行えば瀾滄県やラフ族文化の宣伝に有利となるほか、対外経済文化交流を活性化し、葫蘆節を県内各民族共同の節日として各民族の団結と進歩に寄与しうること、

(3) 毎年四月には省都の昆明で国際文化旅遊節がひらかれ、また普洱茶葉節や隣接する孟連県での潑水神魚節(タイ族)、西盟県での木鼓節(ワ族)が四月に行われ



瀾滄県政府官舎の壁面に描かれたひょうたん

(2010年1月筆者撮影)

るので、この時期に葫蘆節を実施すれば経済面での相乗効果が期待できること、である。これを受け、葫蘆節は二〇〇六年より四月八〜一〇日に行われることになった。

この日程変更の理由がはっきり示しているように、葫蘆文化の宣伝においては観光振興やその経済的効果への考慮が優先されている。ただしこうしたご都合主義がラフ族の伝統文化に背いているわけではない。なぜなら葫蘆節自体がそもそも、

一九九二年に  
 県政府によつて  
 発明された、  
 伝統的儀礼とは何の関  
 係もない民族  
 節日だからである。  
 この日程変更  
 は、跨境民族  
 の相互往来  
 という点からは  
 ある程度成功  
 を収めている

るといえる。葫蘆節が陽暦四月上旬に固定されたことにより、前述のTLBC訪問団も現在はこの時期にあわせて定期的に中国側の同胞を訪ねるようになってきているからである。タイ側のラフ族キリスト教徒にとって現在の葫蘆節は、節日観光の機会であるとともに探親の機会でもあり、かつまた同胞への布教の機会ともなっている。多くのラフ族が一堂に集まる日程を固定したことは、南に去った同胞にも中国を訪問する機会を提供しているのである。

## おわりに

ラフ族を事例に本稿で示してきたのは、跨境民族のダイナミックな性格である。跨境民族というとらえ方は、単に各国に同一民族が拡散しているという平板な事実に言及するだけのものではない。実際には跨境民族としてのラフ族には、中国とビルマという二つの大国のはざまに独自の生活空間を展開し、それが近代国家の国境画定作業の中で複数国に分割されることで結果的に跨境民族となってきたという経緯がある。そして国境線による分割それ自体が、後の時代には越境へのインセンティブを構成してきたのである。人々は歴史のある時期に跨境民族となり、そして跨境民族であるがゆえにさらなる越境がそれに続いてきたといえることができる。

また人々の移動は単に中国から東南アジアへ、という一方的な南下移動だけではなかった。結果的には南下の要素が卓越したとしても、そこには常に逆方向への力学も存在し、一人ひとりの越境者はこの複雑な力学の中で身を処しながら越境を繰り返してきたのである。越境をもたらしただけというのも、単に焼畑適地を求めての移動というだけではない。そこに見られるのは、焼畑を繰り返しつつ雲南からビルマ、タイへと移っていく者、異民族や国家権力との衝突に敗れ、水田を捨てて去っていく者、その過程で再び焼畑民に戻っていった者、あるいは移住先で再び定住度の高い生活を送る者など、多面的な跨境民族の姿であった。

最後にひとつ考えたいのは、跨境民族と中華民族との関連である。中華民族論というのは簡単にいえば、漢民族とともに中国を構成する諸民族は、歴史の初めから一貫して「中国少数民族」だったと主張する議論であり、多民族国家としての中国を束ねる中心的なイデオロギーでもある<sup>⑤</sup>。それに対し跨境民族論というのは、たとえばラフ族の分布範囲のうちで「中国少数民族」はあくまでその一部にすぎないという当然の事実<sup>⑥</sup>に注意を喚起する。その意味では跨境民族論と中華民族論とは原理的に相容れない部分がある。本稿でみたように、現在はメコン流域圏諸国の開放政策や往來の自由化により、ラフ族の住む地域に再び越境の

時代が訪れつつあるかに見える。ではこの越境の時代の先にあるのは、跨境民族論と中華民族論との矛盾がさらに露呈していく過程になるのか、それとも跨境民族の世界が中華民族論に事実上飲み込まれていく過程になるのか。それについては今後の展開を見なければならぬ。

## 注

- 〔1〕 政協瀾滄拉族自治県委員会『拉祜族史』雲南民族出版社、二〇〇三年、四八七頁。
- 〔2〕 王正華・和少英『拉祜族文化史』雲南民族出版社、一九九九年など。
- 〔3〕 申旭・劉稚『中国西南与東南亜的跨境民族』雲南民族出版社、一九八八年。
- 〔4〕 乾隆『雲南通志』卷二四。
- 〔5〕 武内房司「一九世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』有志舎、二〇〇一年。
- 〔6〕 たとえば『清仁宗実録』卷九七、一〇〇、一〇三、一一二、一五八、一六〇などにそうした記述がみられる。
- 〔7〕 片岡樹「山地からみた中緬边疆政治史——一八一—一九世紀雲南西南部における山地民ラフの事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』七三号、二〇〇七年。

- 〈8〉《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員會編『拉祜族社會歷史調查(一)』雲南人民出版社、一九八二年、五〇頁。
- 〈9〉同書、七二頁。
- 〈10〉片岡前掲論文、武内前掲論文。
- 〈11〉一八土司については方国瑜『中国西南歴史地理考釈(下冊)』中華書局、一九八七年、八八二頁などを参照。
- 〈12〉片岡前掲論文。
- 〈13〉芮逸夫『中国文化及其文化論考』芸文印書館、一九七二年、三八五頁。
- 〈14〉J. George Scott, *Gazetter of Upper Burma and the Shan States*, Part 1, Vol. 1. Rangoon: Government Printing, 1900, pp. 576-587.
- 〈15〉周光倬『滇緬南段未定界調査報告』成文出版社、一九六七年(中国方志叢書)。
- 〈16〉雲南省瀾滄拉祜族自治県志編纂委員会編『瀾滄拉祜族自治県志』雲南人民出版社、一九九六年、四六〇頁。
- 〈17〉周光倬前掲書。
- 〈18〉雲南省編輯組『中央訪問団第二分団雲南民族情況匯集(下)』民族出版社、二〇〇九年、一七六頁。
- 〈19〉同書、一五二—一五三頁。
- 〈20〉《拉祜族簡史》編写組編『拉祜族簡史』民族出版社、二〇〇八年、五〇—五一頁。
- 〈21〉片岡樹『アジア周縁社会における移住と国家権力——華南・東南アジア山地民ラフの事例から』塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』有志舎、二〇一〇年、二七四頁。
- 〈22〉雲南省編輯組前掲書、一五七頁。これはラフ族の村人が中央訪問団の来訪に接して述べた言葉だとされている。
- 〈23〉同書、一七四頁。
- 〈24〉同書、一七七一—一七八頁。
- 〈25〉雲南省瀾滄拉祜族自治県志編纂委員会編前掲書、一五四頁。
- 〈26〉同書、二一六頁。
- 〈27〉同書、一〇二頁。
- 〈28〉片岡樹『タイ山地一神教徒の民族誌——キリスト教徒ラフの国家・民族・文化』風響社、二〇〇七年、六三—六六頁。
- 〈29〉Phongsavadan Yonok. National Library Edition, 1961, pp. 501, 523.
- 〈30〉孟連傣族拉祜族自治県志編纂委員会編『孟連傣族拉祜族自治県志』雲南人民出版社、一九九九年、二二—五頁。
- 〈31〉Volker Grabowsky and Andrew Turton, *The Gold and Silver Road of Trade and Friendship: The McLeod and Richardson Diplomatic Missions to Tai States in 1837*. Chiang Mai: Silksworm Books, 2003, pp. 348-349.
- 〈32〉J. George Scott, op. cit., pp. 576-587.
- 〈33〉Holt S. Hallert, *A Thousand Miles on an Elephant in the Shan States*. Bangkok: White Lotus, 1988, pp. 174-175.
- 〈34〉James McCarthy, *Surveying and Exploring in Siam*.

- Bangkok: White Lotus, 1994, pp. 130-131, 142.
- <35> 片岡樹「東南アジアにおける『失われた本』伝説とキリスト教への集団改宗——上ヒルマのラフ布教の事例を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』五六号、一九九八年。
- <36> 雲南省編輯組前掲書、一七二—一七三頁。双江拉祜族佤族布朗族傣族自治県民族事務委員会編『双江拉祜族佤族布朗族傣族自治県志』雲南民族出版社、一九九五年、二六六頁。
- <37> 雲南省編輯組前掲書、一八二頁。
- <38> 孟連傣族拉祜族佤族自治県志編纂委員会編前掲書、三三八頁。
- <39> Alfred W. McCoy, *The Politics of Heroin in Southeast Asia*. Singapore: Harper & Row, Publishers, pp. 304-305.
- <40> 片岡「タイ山地」神教徒の民族誌』七三—七四頁。
- <41> Bertil Lintner, "The Shans and the Shan States in Burma." *Contemporary Southeast Asia* Vol. 4, No. 5, 1984, pp. 411-416.
- <42> Jane R. Hanks and Lucien M. Hanks, *Tribes of the North Thailand Frontier*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies, 2001, p. 223.
- <43> 片岡前掲書、七四—七五頁。
- <44> 同書、三四—三五頁。
- <45> Paul W. Lewis, *Introducing the Hill Tribes of Thailand*. Chiang Mai: Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University, 1970, p. 88.
- <46> Bertil Lintner and Michael Black, *Merchants of Madness: The Methamphetamine Explosion in the Golden Triangle*. Chiang Mai: Silkwoom Books, 2009, pp. 88-89などを参照。
- <47> 《瀾滄拉祜族自治県概況》編写組『瀾滄拉祜族自治県概況』民族出版社、二〇〇七年、二〇九頁。
- <48> 同書、二一八—二一九頁。
- <49> *HZM-LIM Li Satun* Vol. 1, March 1998, pp. 1-2.
- <50> 中国社会科学院民族研究所編『中国少数民族現状与發展調查叢書 瀾滄拉祜族卷』民族出版社、二〇〇二年、一〇三頁。
- <51> 瀾滄拉祜族自治県民族宗教事務局編『從葫蘆裡出来的民族——拉祜族』雲南民族出版社、二〇〇九年、二頁。
- <52> 同書、一〇四—一〇八頁。
- <53> 李義敢・唐新文・楊繼康・趙世坤等編『雲南省参与瀾滄江—湄公河次区域合作二〇〇三—二〇一五年企画研究』雲南民族出版社、二〇〇四年、一九—二〇、二九四—二九六頁。
- <54> 李進參『拉祜族』民族出版社、二〇〇二年。
- <55> 同書、二九頁。
- <56> 政協瀾滄拉祜族自治県委員会前掲書、三八九頁。
- <57> 王正華、和少英前掲書、二四四頁。
- <58> 瀾滄拉祜族自治県民族宗教事務局編前掲書、一〇八頁。
- <59> たとえば費孝通編『中華民族の多元一体構造』(西澤・塚田・曾・菊池・吉開訳) 風響社、二〇〇八年など。